飯能市消費者団体連絡会　会報
しょうだんれん（消団連）
# はんのう消費者便り
No.36
2016 年 3 月 15 日発行
事務局 090-5324-6412 川野

## 映画「ひろしま」上映と戦後70年平和展

川野安紀子

平和であってこその消費生活。私達飯能市消団連は、毎年夏に平和を考える上映会を行ってきました。

しかし、戦後70年を経た日本では「軍縮」という言葉が影をひそめ、２０１４年４月、多くの国民が知らぬ間に武器輸出三原則は防衛装備移転三原則となりました。これまで自衛隊用に製造していた兵器は、これからは外国に輸出することも、また、他国と共同で兵器の開発をすることもできるようになりました。世界の紛争地では、今も多くの命が奪われ、戦火の中を逃げまどう人々がいて、生活の場を捨てざるを得ない人々が難民となって増え続けています。

世界に暴力が広がっていく現状に、「知る」ことから始めようと、戦後70年被爆70年を期して「ひろしま」の上映会を企画しました。

小川町町立図書館で行われた「平和のための小川町戦争展」を見てきたメンバーが、素晴らしい展示だったので飯能でも是非やりたいと希望し、展示物をお借りして「平和展」を同時開催することができました。

８月22日市民活動センターでの上映会に参加していただいた約90人の方は画面を食い入るように見てくださいました。上映会の前後6日間、ロビー（交流広場）で開いた「平和展」では横11メートル高さ2メートル以上の手書きの年表が圧巻で、構想3年の熱い思いが伝わってくる超大作は新聞の切り抜きや写真が貼られ、70年の間に日本が米軍の意向に沿って変容していく様子が良く分かるものとなっていました。沖縄の現状を伝えるパネルと横田基地の飛行ルートについてのパネルも併せて展示しました。

飯能市消団連も独自に、埼玉県内の平和都市宣言をしている市町村の地図や浜岡原発現地見学会の様子を伝えるパネルを作成し展示しました。平和都市宣言をしていない残りわずかの自治体に飯能市が入っていることや、浜岡原発の地盤である相良層が手で崩れるほどのもろい〝砂岩と泥岩の層〟だということを実感していただけたのではないかと思っています。

映画「ひろしま」に関連して核実験の歴史を示す年表と写真も展示。そのほか憲法9条を布と針で表したタペストリーや戦争と平和についての絵本・書籍・パンフレットなども持ち寄って、ささやかではありますが交流の場となりました。

今回の会報は夏の活動を受けて、戦後70年の特集を組み「この夏思ったこと」をテーマにそれぞれの思いを綴っています。

2015 年 8 月 20 日～ 26 日　飯能市市民活動センター

# 映画「ひろしま」は問いかける

小林茂樹

## 映画「ひろしま」は、こうして作られた

「過ちを再び繰り返さないためには目を背けることなく、しっかりと事実を見つめ、記憶にとどめておかねばならない」（「ひろしま」DVD 解説より）

映画「ひろしま」は１９４５年８月６日広島に原爆が投下された直後の惨状と、その後の被災者の苦しみを描いた作品である。

文集『原爆の子～広島の少年少女のうったえ』（岩波書店、１９５１年）を元に脚本化され、１９５３年に製作された。製作資金は日教組の教師たちがカンパを寄せ、広島市・広島県教組の全面協力のもと、８万人を超える広島市民が手弁当のエキストラとして参加。映画に必要な戦時中の服装や防毒マスク、鉄カブト等は、広島県下の住民から寄せられたという。

１９５３年10月９日の「時事通信」に映画評論家今村太平がその状況を書いている。

「広島全市民が応援

…映画は全部が広島でとられ、市当局および広島市民、広島県労組会議の全面的な応援をうけた。広島市は広島出身の月丘夢路の出演を松竹に承認させ、自由労務者の日当を払い、・・・広島電鉄はロケ用大型バスを提供し、広島大学理学部では原爆咋裂の技術面を指導・・・広島市民は衣裳をもちより、各家庭から一人ずつ出演し瓦礫は小学生が拾いあつめ、文字通り広島全市の協力による映画となった。」（出展：独立プロ名画保存会作成「ひろしま」資料集より）

制作スタッフには実力派・若手が結集し、徹夜の連続で映画を完成させたそうである。助監督の熊井啓は「ひろしまロケ記」にこう記している。

「…負傷者の衣装は、日教祖の先生たちがシャツ、ズボン等を集めてきたので作られました。庭に何列か並べた上にガソリンをまき、それに点火してボロボロにするのです。エキストラの人達は、それぞれ、それを着てその躯中にメイキャップといっても、火傷や土、ほこりの汚れ等でしたので、その材料は大量に作らねばなりませんでした。…広島の赤ん坊から老人に至る幾千幾万の人々が、何も不平ももらさずやってくださいました。この映画『ひろしま』の群衆撮影が成功したのも、これらの人々の力が極めて大きかったことを記さねばならないのです。大勢の人々が、被爆者たちで、エキストラの演技は素晴らしいものだったと思います。

ラストシーンで、また今日の群衆が出ます。大きな人の流れが原爆ドームへ集っていくシーンですが、二万人の人達が、雨の中を雨具を着て、何カ所かの広場に集合しました。大フカン撮影でしたので、大勢の人々が必要だった訳です。その時、原爆ドーム附近の道約直径１ｋｍのところは人で一杯でした。広島市始まって以来の大デモンストレーションだったといわれておりました。」（同「ひろしま」資料集より）

## 「ひろしま」の時代背景

原爆を題材にした映画は戦後なかなかできなかった。ＧＨＱのプレスコードで、原爆の被害に関する報道は、規制されていたからだ。それでも１９５０年「長崎の鐘」という主題歌でも有名な初の劇映画が製作された。長崎医大の永井隆博士の伝記を映画化したものだ。メロドラマ仕立てで、原爆の惨禍は描かれていない。むしろ永井博士が放射線医療の開拓者でもあり、彼自身、被爆の後遺症で亡くなったが、原子力の平和的利用に関して積極的な発言をしていて、現在も原子力関係の学者たちにより、尊敬する人として言及されている。

１９５１年のサンフランシスコ条約で日本が「独立」しＧＨＱの検閲から自由になると原爆の惨禍を描いた映画が求められた。

そんな中で、長田新が編集した『原爆の子』を題材に映画化が企画され、１９５３年、新藤兼人監督が映画「原爆の子」を製作した。当初は日教組も協力していたが、途中で、新藤作品とは決裂する。被爆のシーンが、主人公（乙羽信子）の回想シーンで象徴的に描かれていて、叙情的過ぎるというのがその理由だ。

１９５０年に朝鮮戦争が始まり、警察予備隊ができた。朝鮮戦争の特需で街の景気もよくなり、日本はまた戦争への道を歩むのではないか、原爆が使われるのではないか、との危機感から、もっと原爆の実態に迫った映画を求めたのだろう。日教組は独自に映画を企画し「ひろしま」を製作した。「いかにしてあの日を正確に再現するか」が映画の最大の目標だといわれた。

「ひろしま」には松竹の看板女優月丘夢路、岡田英次、山田五十鈴などスターをそろえている。映画界としてもＧＨＱのしばりから離れてやっと作れる喜びと、作らなければいけない使命感があったのではないか。スタッフに、「聞けわだつみの声」の関川監督、脚本八木保太郎などの実力派やこれから活躍する若手をそろえたことにも現れている。　こうして、広島市、広島の市民の思いと願いを

# 戦後70年平和展

2015年8月20日～26日
主催：飯能市消費者団体連絡会

飯能市市民活動センター（丸広７Ｆ）ロビー

普段の生活の中で戦争や平和に関することは暗い部分（むずかしいし、めんどくさいし）として避けて通ってしまっている方も多いと思いますが、今回のように街の風景の中にそういう問題を気軽に交流できる一角があってもいいのではないかと思います。

戦後７０年、どうしたらずっとこのまま戦後でいられるのか？共に生きながらえる社会を作るためにも、対話（過去と現在、そして未来、他国と日本、自分と他者）をしながら、相手と自分の考えをすり合わせていく作業が大事ではないかと考えています。（野崎）

結集し映画は完成した。

## なぜ幻の映画になったのか

ところが、１９５３年９月松竹は「反米色が強い」と一部カットを要求し、日教組がこれを拒むと全国配給を断った。

今村太平は先の記事に次のように記す。

「ここに見逃しえないことは、この映画の意義が大きく、その反響がひろまるにつれて、これにたいする政治的圧力がましていることである。この圧力は一映画会社に「ひろしま」の上映を拒否させることから、さらにこのような映画を製作・上映する日教組のありかたを否定する方向に発展している。」（時事通信１９５３年10月９日）

劇場上映が不可能ならば、日教組の組織を通して全国自主上映を組織化するという方法もあったろうが、それもうまく進まなかったようである。一部の県で見られたが全国展開はされなかったらしい。そうして「ひろしま」は幻の映画になった。

近年になって、映画の助監督だった故小林太平氏が個人で自主上映を始め、各地で見られ始めている。

## 製作当時、海外の反響は？

▽１９５３年　英の大衆新聞デーリー・スケッチ紙が「ひろしま」批判をトップ掲載。「日本人は８年後の現在も憎悪の念をかき立てている」

▽１９５５年　ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン「全世界の人が残らずこの映画を見れば２度と戦争が起きることはないだろう。」

## 「ひろしま」上映会アンケートから

●１９５３年製作、朝鮮戦争―日本が経済にわいていたことを考えさせられました。反戦の構成が後半よく伝わってきました。前半は、広島のことを自分の生活の中で感じず過ごしていたなあと思いながら観ていました。

●古い映画なので原爆投下のシーンなどあまり期待していなかったけれど今まで見た原爆映画の中でも圧倒的でした。

原爆投下から７年のヒロシマと原爆の被害者の当時の広島市民のエキストラは実際の体験者なので恐ろしいものがありました。もっと多くの人に観てもらいたいと思いました。

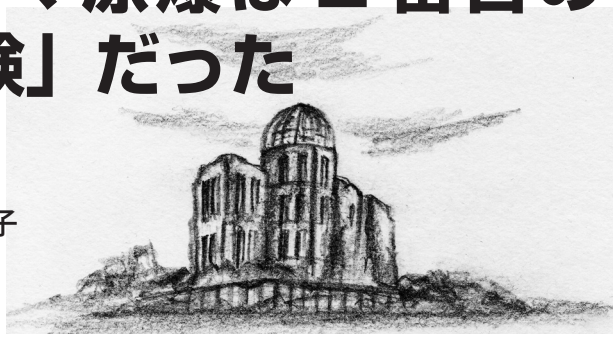
原爆の恐ろしさももちろんですが、８月７日に被爆者の前で「戦争は終わっていない。職場に戻るように」と指示をだす日本軍は本当に恐ろしいです。一片の情けもないですね。

少年たちが外国の観光客に、ドクロ（遺骨）を売るのは「はだしのゲン」でもでてきたので本当に当時あったんだなと思いました。

フィクションだから表現できることがあると思います。現実の原爆は人体が破壊されて、それをリアルに出すともう映画としてつくることが出来ない。丸木美術館の「原爆の図」でも人体のあからさまな破壊の表現はなく、人の尊厳を保つためにあえて取り入れていないと思います。原爆の被害者であった当時の広島市民が８年後に撮ったこの映画であえて原爆を表現しないではいられなかったその思いを考えると本当に感動します。怒りと嘆きを表現するグリーフワークでもあったのかと思います。（50代）

＊注　グリーフワーク（ｇｒｉｅｆ ｗｏｒｋ）悲しみを表現することで、喪失を受け入れていく過程を、遺族同士が共有する取り組み。

# ヒロシマ原爆は２番目の「核実験」だった



木崎 久美子

この映画には二つの差別が描かれている。

まず冒頭のシーンで、高校性が授業中、こっそり、本を周りの生徒にまわしている。本のタイトルは「僕らはごめんだ　東西ドイツの青年からの手紙」（藤原正瑛・著　1949～1952 年までの間、東西ドイツの友人たちと交わした手紙を編集したもの）。学生が読み上げているシーンがあったのだが、記憶することはできなかった。しかし、有難いことに、上映担当スタッフが用意してくれていた資料の中に、映像の中で読まれた部分を書き出してくれていた。

すこし抜粋してみる。「…ほとんどの大多数のドイツの知識人たちは、こう思っているのです。ヒロシマとナガサキでは、けっきょくのところ、二十何万かの非武装の、しかも何ら罪もない日本人が、あっさりと新兵器の〝モルモット実験〟に使われてしまったのだ。そして、つまりそれは、日本人が有色人種だからということにほかならないのです……ぼく自身が白色人種に属しているからこそ、この問題のこういう点が、君たちよりも、もっと本能的・直観的にはっきりと理解できるのです。……」

アメリカの核実験のスタートは、1945 年ニューメキシコ州。この時はプルトニウムを使ったもの。その21日後に、初の濃縮ウランを使った原爆が広島に投下された。これが2回目の核実験だったと確かに考えざるを得ない。ドイツ人が言っていたような、日本人を使ったモルモット実験。あまりに非人道的な事実。12万人の老若男女の命がプツンと切られ、そこから先に存在していたはずの「時間」「暮らし」を想う。やるせなくなる正当化される戦争によって、消される命が後を絶たない今の世界を思うと、強烈に胸が締め付けられる。

## そして、二つ目の差別

やはり高校の教室でのシーン。教師が「原爆にやられた人は?」と問う。3分の1くらいの生徒が手を挙げる。原爆の影響と思われる症状を女生徒が訴える。その言葉に、笑いがどっと起こる。この映画の製作は原爆投下から8年後。まだまだ傷が癒えないであろうこの時期に、この笑いはなんだろうか、と疑問に思った。その答えは、次のシーンの男子生徒が訴えるセリフの中に在った。

「何がおかしいんだ!これだから何も言いたくないんだ!」彼は続けて言う。「原爆症でいつ死ぬか、ビクビクしながら生きているんだ。そんなこと言えば『原爆をはなにかけている』『原爆に甘えている』って笑うんだ。」と。そして、この生徒が最後に「世界の人たちでなく、一番身近な人にこそ、原爆症を理解して欲しいんだ」と訴える。

ふと、3・11の原発事故のことを想った。今年の3月で福島の原発事故からまる5年になる。私たちは忘れかけていないだろうか。いや。忘れてはいない。でも、意識から遠くなっていないだろうか。「ひろしま」に描写された「原爆投下から8年後の教室」。そこに写し出された被爆者に対する無理解は、原発事故後の福島の方たちに対するものと重ならないだろうか。映画の中で、「世界の人よりも日本人に、日本人よりも広島の人に、もっと言えば、この教室にいるみんなに分かって欲しい!」と訴えている場面がある。身近な人の理解がないことが一番辛いことなのかも知れない。

無理解や差別は、どうして生まれるのだろう。想像力の欠如と教育なのだろうか。私自身は?と考えた時、何かのきっかけで膨れ上がる差別意識の種は私の中にも存在しているかも知れないと思った。

## 現在に甦る言葉

工場をやめたという若者が、恩師に訴えるラストシーン。終戦後の工場では、朝鮮戦争のための大砲などを作っていた。チャップリンの映画「殺人狂時代」を観たというこの若者は、次の様に訴える。

「映画で言っていた。戦争でたくさんの人殺しをしたものが英雄で、他の人殺しは死刑になるって。先生、また戦争がはじまるんですか!戦争が始まれば今度は僕たちが戦地に引っ張り出されます!なんの恨みもない人間同士が殺し合いをさせられるんです!」

この言葉は、数十年経っても色あせることがない（色あせて欲しいが）。最近、都内で日本の若者が訴えている言葉の中に、同様の言葉を聞くようになった。

## 差別意識が利用される戦争

冒頭で紹介したドイツ青年の言葉から思うことは、差別意識を利用さえすれば、人はどんな非人道的な行動も起こせるということ。世界には色んな民族が生きている。その民族の違いは「文化や歴史」または「性格」であって、決して「優劣」ではない。違いを尊重できる教育と豊かな想像力の重要性を感じている。

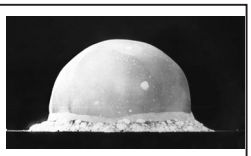
加害者と被害者を作り続ける戦争は、正義では決してない。

政治家も国民も、戦争にさせない必死な努力をし続けることで、本当のところの「正義と平和」に近づけるのかもしれない。

# ヒロシマの後 2000 回以上の核実験が行われた

1945 年にアメリカ、ニューメキシコ州で初めての核実験（トリニティ＝三位一体）が行われた。それは長崎原発と同じプルトニウムを使ったものだ。広島原爆は初の濃縮ウランを使った核実験だった。
翌年 2 月に、米国は太平洋でさらなる核実験の計画を発表した。　クロスロード（十字路）作戦。兵器としての威力を検証するためのものだった。第 4 回目の核実験エイブル、70 隻の艦船が集められ、生きている動物も提供された。その後、米国、ソ連、英国、仏国を中心に 2000 回以上の核実験が行われた。

## 核実験の歴史


トリニティ実験

1945　3/10 東京大空襲　　米国　**トリニティ実験** 7/16 ❶ 20 キロトン（プルトニウム型）
6/23 沖縄戦終結　　米国ニューメキシコ州
7/26 ポツダム宣言発表　　・**リトルボーイ**　8/6　❷ **15 キロトン（ウラン型）**　**広島**
8/14 ポツダム宣言受諾　　・ファットマン　8/9　❸ 21 キロトン（プルトニウム型）長崎
憲法改正の検討が始まる

1946　1/1 天皇の人間宣言　　米国　**クロスロード作戦**　太平洋：ビキニ環礁
11/3 日本国憲法公布　　・エイブル　7/1　❹ 21 キロトン
・ベーカー　7/26 ❺ 21 キロトン（初の水中爆発）

ベーカー実験　きのこ雲の下には艦船この実験は原爆の兵器としての能力を検証した。

1948　極東軍事裁判判決　　米国　サンドストーン作戦　太平洋 エニウェトク環礁〈3 回の核実験〉

1949　中華人民共和国成立　　ソ連　初の核実験　セミパラチンスク核実験場（40 年間で 456 回の核実験）

1950　**朝鮮戦争**（～ 53)
警察予備隊　レッドパージ

1951 サンフランシスコ平和条約。日米安保条約調印　　米国　16 回の核実験　太平洋、米国ネバタ州

1952　メーデー事件 破防法成立　　米国　初の水爆実験　● 10 メガトン級（**広島原爆の 700 倍**）

1953（**映画「ひろしま」製作**）　　米国　11 回の核実験
◆アイゼンハワーが国連で提案「**Atom for the peace：平和のための原子力**」

1954　**自衛隊発足**◆初の原子力予算
米国　6 回の核実験　● 15 メガトン（水爆）**第五福竜丸被曝**（ブラボー実験）

1956　国連加盟　◆原子力基本法

1955 年から 1963 年までの間に , 米国は計 269 回の核実験を行った。
ソ連 200 回以上，英国 92 回，仏国 15 回以上

1960　日米新安保条約調印

1961　　ソ連　**史上最大の水爆実験**　● **50 メガトン**　ツアーリボンバ（**広島原爆の 3300 倍**）

1963　◆東海村原子力発電所　　**部分的核実験禁止条約（PTBT）の締結**
（大気圏、宇宙空間、水中での核実験を禁止，中国、仏国等未署名）
**これ以降は地下核実験が行われた。**

1966　　包括的核実験禁止条約（CTBT）　国連で採択
米国，イスラエル，中国，イラン等は署名のみで未批准。
北朝鮮，インド，パキスタンは未署名

1968　　**核拡散防止条約（NPT）締結　（2010 年現在 190 ヶ国が未加盟・脱退）**

原爆ができてこの 70 年。これまで､実験地でどれだけの人々が生物が被爆したのだろうか？
そしてまた、この大地にも私たちの体内にもその痕跡（放射性物質）は残っている。　　年表作成　小林

# 2015、この夏　思ったこと…

## 何かが違う

あなたは平和の大切さを伝えたい、誰かと思いを共有したいと思ったらどんなことをしたら良いと思いますか？ 平和展や「ひろしま」の上映会を通してその難しさを考えずにはいられませんでした。それは、平和と対峙する戦争について直視するところから始めなくてはならないからかも知れません。戦争は何故起きたのか、そしてもたらしたものは何か、それを知るために見たもので自分の中がいっぱいになってしまいます。気持ちがダークになってしまいます。

安保法制の言うところの「平和」も何か感覚的に違うとは思う。でもうまくは説明できない。国会を見ていても空しくて聞いているのがつらい。何か違う、何か違うと思っても良いようにあしらわれている気持ちになってしまう。憲法を読むと、人類の希求するものが平和となっていて、私たち日本人は恒久平和に邁進するとなっているのに今、安保法制の邪魔になるからと、縛られるべき政治家が縛りを解こうと憲法を変えようとしています。国民を縛って兵器を売るために。

戦争はなんのためにするんでしょうか？それは欲しいものを手に入れるためにですよね。力で強引に奪うこと。仕事がなくなったら困るし、石油がなくなったら困るし…。すべてを貨幣経済に頼れば平和と引き換えにしてもそれらを得なければならないと考えるようになるのかも知れません。

気が付いてみると、私たちは国が進める方向に進んでいて、自分たちが生活を成り立たせるために必要な技術を奪われてしまいました。畑をしたり、食べ物を保存したり、着るものを縫う力を失ってきているのではないでしょうか。

吉岡

## 映画を通して世界を知る

原爆投下から6年後（1951年）に自らも被爆者であった長田新氏（元広島文理大学長）が、被爆した子ども達の手記をまとめ、「原爆の子」という題名で本を出版した。本の存在は知っていたが、映画「ひろしま」がその作品をもとに作られたことを私が知ったのは今から3年前だった。翌年小川町で上映会があり観に行った。かなりの人数の広島市民が映画に参加、協力していたことに感動した。今回飯能でも観る事ができ、上映後の交流会での話や配布された資料から、あの原爆投下はどんな意味があったのか、またその後の核兵器をめぐる情勢についても自分なりに深める事ができた。戦争は目に見える形で環境破壊の最たる物だし、人間の体を破壊し傷つけるのみならず、心をも傷つける。同じ過ちを繰り返さないためにも～あの戦争は一体何だったのか～戦争の実態を知り、それを次の世代に伝えていく責任が私たちにはある。とりわけ日本では昨年秋の安全保障関連法の可決、原発の再稼動など戦前へ逆戻りかと思うような動きがある。一方世界全体では今何が起きているのか？独りよがりにならずに色々な方法で、知り、考え、行動していかなければ平和は守れない。

映画「ひろしま」から

昨年は邦画、洋画両方で戦争について知り、平和を考えるのによい題材となる映画がたくさん上映された。わたしが見た中で特に印象に残った作品は以下である。

「あの日の声を探して」

1999年に始まった第二次チェチェン戦争。ごく普通の青年が戦闘マシーンになって行く様子、住んでいた村が襲撃され、1人で逃げまどう少年とその子を保護する女性の生き様が丁寧に描かれていた。

「ふたつの名前を持つ少年」

ナチスドイツの手から逃れ、過酷な時代を生き抜いたユダヤ人少年の実話の映画化（著書「走れ、走って逃げろ」）。最終的には助かるのだと分かっていてもハラハラドキドキの連続で、助かったのも奇跡としか思えない。

「草原の実験」

旧ソ連が現カザフスタンで実際に行なった核実験から着想を得ての映画化。セリフが一切無い！それだけに映像が目に焼きついた。父と娘の平凡だけれど平和な日常、両思いになった少年と少女（美しい！）があやとりを延々とする場面…それらを一瞬で破壊する核爆弾の非情さが伝わってきた。

「独裁者と小さな孫」

シネ・フロント社発行の冊子に載っていた監督のメッセージ＝「この映画は、どの国にも当てはまることを描いている。独裁者、権力者がなにか間違いを犯しても、国民は黙っている。だから一生、圧制の中で生きるしかない。この状況を作り出しているのは、私たち自身に責任がある。なぜ黙っているのですか。」独裁者と小さな孫が逃亡の末に刑に処されようとする最後のシーンで、やっと希望の光を見ることができた。

野崎

# 私の思い

２０１５．９．１９　安全保障法制の強行採決で、日本は戦争できる国になってしまった。

戦後７０年の夏、私は初めて「ひろしま」を観た。悲惨な原爆体験を経た広島の人々、８万人のエキストラ参加もあった。なぜか知られることなく埋もれてきた映画です。さらに、「ひろしま」制作に関わった人々を描いた番組も鑑賞し、あらためて映画の意義を考えています。被爆後８年目に日教組が作ったという稀有な映画「ひろしま」。　敗戦と占領の下、アメリカは原爆被災者と核隠し、日本政府も追随姿勢でした。差別や貧困はみえなくされ、当時の冷戦時代において、アメリカは日本国憲法９条があるにもかかわらず再軍備をせまったのです。警察予備隊から自衛隊へと、ただいまに至るもかろうじて平和国家としての日本はたもたれていますが…。

核の平和利用というまやかしで原発を使い続けているが、人の手に負えないことは自明の理です。いまも原爆症で苦しむ人、２０１１年３月１１日の東京電力福島原発事故後の放射線による被ばく影響は、国の責任で健康診断、避難、保養をすすめていかなければならないでしょう。

わたしたちは、２０１５年国会前にあつまった多くのひとびとの行動をあきらめることなく引き継ぎ頑張ることで、希望をつかんでいけたらと思います。

**小園**

# 少年

２０１５年の夏は、国会前に何度も通った。「民主主義って何だ？！」と叫ぶ若者の声に、そうだ！それこそ問わなければならないんだ、と共感した。さまざまな人の姿を見た。仕事帰りの鞄を下げた男性。おしゃれな服のカップル。「行ってみようぜ」というノリの元気な若者たち。自筆のプラカードを掲げて静かに立ち尽くす初老の男性。雨に打たれながらベビーカーを押す若い母親。杖を頼りに一足ずつゆっくりゆっくりと議事堂に向かって歩く高齢の男性。「戦争は絶対起こしてはならないんだ」という思いが現れていた。

そういう時期に、わが町飯能で「ひろしま」上映会を開けたことは本当に良かった。映画の原作である「原爆の子」を読んだ。被爆から６年後に小学生から大学生までの子どもたちが当時の体験を綴っていた。当事者のそれも子ども自身の言葉は私の心を揺さぶった。　冒頭の小学４年生佐藤朋之さん（被爆当時４歳）は「目の中にはり（針）がたくさんはいって、どこがどこだかわからない」と書く。　そうして被爆し父親も失う。

「原爆の子」から半世紀後に当時の執筆者たちがもう一度手記を出した。「原爆の子　その後」（１９９９年）。そこに佐藤さんの名前はなく娘さんの手記が載っていた。佐藤さんは慢性頭痛、狭心症などいろいろの原爆後遺症に苦しみ、申請したにもかかわらず被爆手帳も得られず、疲れきって自殺されたとあった。映画「ひろしま」には佐藤さんを投影したと思われる坊主頭のかわいい少年が映っていた。

原爆を体験したのちもなお、何度も何度も彼を苦しめ続けてきた私たちの社会とは、何だろう。

**大木**

# せんそう

子どもの頃、戦争は遠い過去の出来事で、これからわが身に降りかかる日が来るかもしれないことなど想像もしなかった。

戦争は人を殺し、文化も生活も破壊する。それは人間が一番してはいけないことだと誰もがわかっているはずだった。

なのに、なぜ戦争という極限の暴力は未だに無くならない。

普段の暮らしの中で決してやってはいけない殺人や破壊が戦争ではどうして許される。

なぜ世界では、こんなあからさまなダブルスタンダードがまかり通っているの。

戦争の準備のために軍隊を持ち、兵器を持ち、人殺しの練習をする、そんなことは真っ当なことではないと、

その背景にある武器産業は人の道に外れていると、どうして父や母は子に諭さないの。

自衛の為、威嚇の為に武力を備えれば備えるほど安心などという妄言を容認するのか、

どうして安心などと言えよう、見ず知らずの人間同士が殺しあうことが前提にあるのに。

人殺しの末にある平和が本当の平和と言えようか。

よく考える・・私はどんな状況に直面しても人間らしい矜持を持ち続けることができるだろうか、

戦争を否定し人殺しは絶対にできないと言い続ける勇気を持ち続けることができるだろうか。

誰にとってもかけがえのない、たった一つだけ与えられた命、それを尊重し大切に思う気持ちを生き方の中心に据えることができるだろうか、

私の生活が誰かの命を損なう道につながっていないか、そんな社会を容認していないか、

忘れず問い続けることができるだろうか。

**早瀬**

2015、この夏　思ったこと…

## 平和への選択

2015年の夏は私にとって忘れられない年になった。

5月末に骨折をしてしまい、1か月の入院、手術。その間に「安保法制」をめぐる情勢は刻々と変化し、退院した頃には衆議院特別委を通過。居ても立っても居られず、最初は松葉杖をつく状態で飯能駅頭で反対アピールをした。長く立っていると脚が腫れてくるような頃だった。でも家に居るより、駅で訴える方が気持ちが楽だった。8月に入ると国会前は何万人の人々が集まるようになっていた。私も国会前に行きたかった！でもまだ不安な足では諦めるしかなく飯能駅での反対アピールを続けた。夏の夕方、夕立の日もあった。9月に入ると毎日のように駅前に通った。

「これから国会に行くところです」

「がんばってください」

と声をかけてくれる人がいて、はげまされた。9月19日未明に法案が成立。予想していたこととはいえ、気力が萎えた。

でも、止めるわけにはいかないと週一（毎週水曜日）で仲間と駅頭アピールを続けた。最後は12月30日。傍から見たら、物好きな人たちと見られるだろうか。でも共感してくれる人がいると信じたい。日本が戦争をする安保関連法をなんとしても廃止するために、今できることをしておきたいと思う。沖縄の人たちは「私たちは決して負けない。なぜなら勝つまで諦めないから」と言う。

その心情を持ち続けることは至難なことだけど、見習って駅頭アピールを続けようと思う。

平賀

講演会

## くらしの足元から憲法を考える

元国立市長　上原公子さんに聞く

2016年3月21日（月・祝）13：00開場・13：30開演

飯能市市民活動センター多目的ホール（丸広7F）

「国民の保護に関する飯能市計画」知ってる？

「緊急事態」って震災？戦争？

緊急事態条項って何？

今年7月には参議院選挙。3分の2以上の議員を獲得できれば、改憲へと踏み切ろうとしている現政権。9条もさることながら、先ず「緊急事態条項」を創設しようとしていると聞きます。首相が全権を掌握できる言われる「緊急事態条項」―それが成立したら、私たちの暮らしにどんなことが起きるのでしょうか？

憲法を無力化するって本当でしょうか？憲法の掲げる平和主義・基本的人権を守るために、地方自治体としては、何ができるのでしょうか？できないのでしょうか？

国立市長を2期8年務められた上原公子さんを講師に迎え、ともに学びます。

資料代500円・保育あり300円（保育申し込み3・14迄）

問い合わせ 099－5324－6412 川野

主催：飯能市消費者団体連絡会

## あとがき

●繰り返し繰り返し観られなければならない映画、「ひろしま」上映され続けることをねがう。

●歴史の事実を正しく知ることが出来れば、いまの政治により的確な判断と選択ができる。と思う。今年7月の選挙で私たちが、どんな考えの候補を国会議員にするかの選択は、明日の日本の私たちの暮らし、命にかかわる、本当に大事で重要な選択になることを深く思い、みんなで確認し合いたい、と切に想っている（平賀）

●戦争が何をもたらすか予測のできる「私」が次の世代の子ども達に戦争を残すわけにはいかないし、人の起こすことは人が止められるはず、「私」が止めなければと思っています。（川野）

挿絵・早瀬あかね